

対談

文化力 こそ 地域力

外へ向かう勇氣、
外からの発想

国際交流基金(ジャパンファウンデーション)はサントリー文化財団と2003年度に「地域文化と国際交流を考えるワークショップ—地球が舞台」、そのまとめとして2004年11月に「シンポジウム—地球が舞台」を開催しました。コーディネーターを務められた御厨貴氏、パネリストとして出席された上山信一氏の両氏に、世界の中で地域文化をどう位置づけ、どう育てていくのか、地域社会を活性化するための手段としての国際交流のあり方について、改めて議論をお願いしました。



みくりや たかし
御厨 貴
東京大学先端科学技術
研究センター教授



うえやましんいち
上山信一
慶應義塾大学教授



人物撮影(P.8, 11, 14): 関 暁

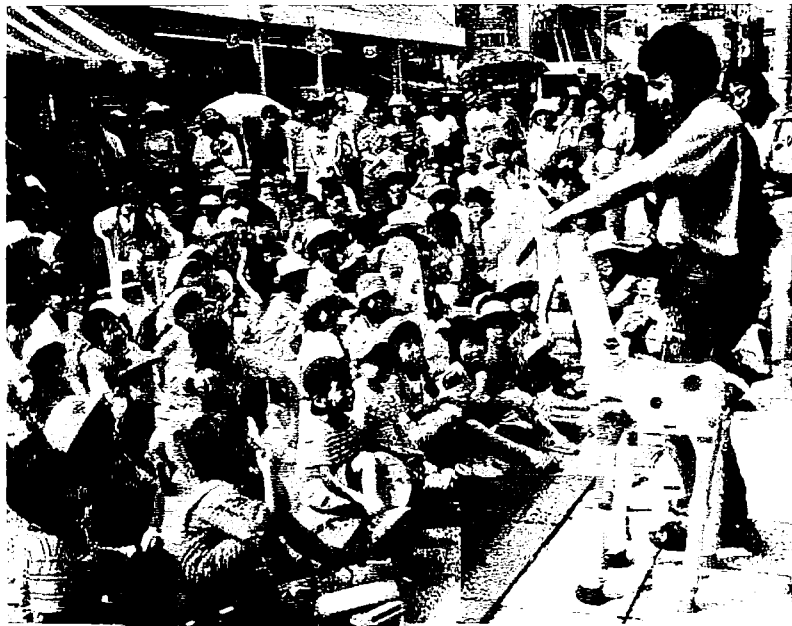
地域の文化力競争の時代へ

御厨 2003年度のワークショップや昨年のシンポジウム「地球が舞台」を通して、私たちはサントリー地域文化賞や国際交流基金地域交流賞を受賞した地域を実際に見たり、報告を聞いたりしてきました。その話に入る前にまず地方や地域を取り巻く状況を見ておきましょう。

「地方の時代」というのは言い古された言葉ですが、その内実はずいぶん変わってきましたね。政策的には、1962年に閣議決定された全国総合開発計画から「地域間の均衡ある発展」を基本目標に掲げ、すでに地方や地域に着目はしています。しかし、それは基本的には産業を誘致して開発しようといった、地域に中央と同じものを作ろうという発想でした。地方の側も横並びで補助金をいかに取ってくるかが最大の関心の的でした。

全国総合開発計画はほぼ10年ごとに改定されますが、1987年の第四次(四全総)に至っては、もう地方はいい、東京に一極集中しようという話になったわけです。では、東京に文化が生まれたかという点、バブル崩壊とともに虫食い状態のまま。1998年の「21世紀の国土のグランドデザイン」(五全総)はほとんど機能していないと言えるでしょう。

上山 明治以来、富国強兵、殖産興業の枠組みのなかで中央集権的に地方の面倒は国が見てきた。ここ30年、ずっと「地方の時代」と言われてきたのも、実は地方でも東京モデルを展開させようというものだった。しかし、いまや中央、国の発展モデルが見えなくなってきました。今の「地方の時代」と



「いい大人形劇フェスタ」(長野県飯田市)は国内外からさまざまな人形劇団が集まる、日本最大の人形劇の祭典。毎年8月上旬に開催され、文化会館、公民館などのホールのほか、地区集会所、学校、保育園など市内の約100会場で、合計250ステージ以上の人形劇が上演される。市民スタッフは2000名にのぼる 写真提供: いずれも各団体



いうのは、もう国は面倒を見ないから、あとは勝手にやれという意味です。これを危機ととらえるか、チャンスととらえるか。それによって今後の地方の生き方が違ってくる。

お金の流れから見ると、地方から都会に人は集まり、都会を中心とする大企業が稼ぎ、それを国が税金という形で集約して、地方に循環させてきた。公共事業と地方交付税は、都会に出てきた地方の人たちからの仕送りだとも言える。

ところが、今は国にお金がなくなり、地方は勝手にやってくれとなった。「国から地方へ」というのは改革の理念でもあるがお金の問題が大きい。公共セクターは700兆円から

1000兆円の累積債務。企業は200兆円から300兆円の不良債権と言われます。これに対して、個人、つまり家計が1400兆円の資産を持っている。地方からすると、今後は都会を中心とする個人の資産が直接流れてこ

ないとやっていけない状況です。

御厨 地方の時代とはいえ、追従するべきモデルもなくなり、財源もないという状態ですね。

上山 そうですね。地方側としては、都会の個人が自分たちの地域に目を向けてくれるビジネスモデルを自分で作らなくては行けない。京都や金沢など、観光地として確立された場所なら、もつと遊びに来てくださーいと言えはいい。しかし、そうでない地域は厳しい。北東北のある村の極端な例だが、何もないから霊園と温泉をセットにして東京から墓参りで年に2回でも来てもらおうかという話になる。

多くの場合、有機野菜を都会の人たちに産地から直販するとか、夏休みに子どもたちを2カ月ほど引き受けて一緒に山を歩くといった自然を生かす活動がある。しかし、自然はどこにでもある。なぜその地方でなければいけないのか。それを説得力のある形で訴えなければならぬ。1400兆円というお金をどうやって自分たちの地域に還流させるかという意味では、地域間が文化力を競う時代になってきている。

海外に開くことで地域文化を見直す

御厨 私たちが見てきた事例でも、中央モデルや東京モデルを特に意識しないで、自然にやってきたらこうなったというケースがありますね。例えば、長野県飯田市の「いい大人形劇フェスタ」の場合、もともと浄瑠璃の伝統があった場所ですが、とにかく人形劇をやってみたらと1979年から始まり、人形劇の関係者と地元の人たち、行政との三者の連係の形でずっとやってきた。そのなかで小学校でも人形劇をとという話が出てきた。人形劇に触れようと、全国から人が集まって

「YOSAKOIソーラン祭り」(北海道・札幌市)。1991年、一人の学生の発想から始まったお祭りは現在、参加者4万4000人、観客動員数は200万人を数える一大イベントへと成長し、札幌の初夏を彩る風物詩として定着した。高知県のよさこい祭りや北海道のソーラン節がミックスされ、参加者による自由で独創的な踊りが披露される



くる。そうこうするうちに、今度は海外との提携が始まる。東京を通らずに人形劇に関わる人が全国から集まってきて、突然、国際化したわけです。

上山 同様に「YOSAKOIソーラン祭り」は北海道の札幌で生まれて広がった。歴史が浅く地元こだわりのないからできたと思います。よさこい祭り自体は高知のものですが、雪解けの6月は何かやりたいという北国の雰囲気だったりとはまった。飽きさせないために毎年工夫をし、全国各地にも広がり、いまや世界につながるところまで来た。関連グッズやブランドもできて、経済にもつながる。しかも、リーダー

の長谷川岳氏が地元出身ではないのがおもしろいですね。

これからの時代、必ずしも東京の檜舞台をふんで海外へ出ていくというものでなくなる。日本の地域文化が本来持っている力は、客観的に見れば、かなりレベルが高い。地元の方は、「いや、たかが出舎の歌舞伎です」などと謙遜しますが、十分世界に通用する。日本の伝統芸能は中国や朝鮮半島からいいものを継承し、長い時間をかけてその地で育まれたわけです。そういう意味では地方はいわゆる「文化果つる地」どころか、「文化煮詰まる地」であって、それを世界中に素直に見せればいい。東京で認められることをめざすよりも、まず海外の人に見せてみる。そのあたりから、地方と地域の位置づけを相対的に再発見できる可能性もあります。

最初は遊び心から広がっていく

御厨 飯田のケースと似ているのが、富山県南砺市(旧・福野町)の「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」ですね。トリニダード・トバゴの楽団が1カ月ほど町に滞在し、地域の人たちがステイールドラムを習得した。そこから楽団「スキヤキ・ステイル・オーケストラ」が生まれ、各地で演奏活動を行なっている。これも突然、トリニダード・トバゴと結んだわけでしょう。現実には飯田や福野の人と話をしてみると、行政に関わっている人を含めて、楽しんでやっています。そこがポイ



みくりや たかし ● 東京大学先端科学技術研究センター教授 / 東京大学法学部卒。東京都立大学教授、ハーバード大学客員研究員、政策研究大学院大学教授を経て現職。政治学の視点から情報文化社会と切り拓く新たな研究教育に挑戦。また、オーラル・ヒストリー夏の学校の立ち上げに成功。主な著作に『歴代首相物語』『オーラル・ヒストリー』『保守の終わり』など

↓「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」(富山県南砺市)は1991年に始まった音楽フェスティバル。アジア、アフリカ、中南米を中心とした音楽を紹介。演奏者は長期にわたって滞在し、ワークショップを通じて、市民との交流を図る。「スキヤキ・スティール・オーケストラ」はその過程から生まれた地元市民のグループ。県内外で公演を行なう

ントで、一生懸命頑張つてやろうとするとかたびれちゃうんですね。

上山 そうですね。京都、金沢の文化がすごいのも、日常から文化に触れて、みんなが遊んでいるからですね。そのうえで発信しブランドになっている。

御厨 その遊び心が広がっていく先に何が見えるかでしょう。

上山 芸術やお祭りだけでなく、食べ物とか、工芸品、ファッションなど、いろいろなものがつながつて盛り上がっている。だから魅力的なわけですね。まず自らが楽しみ、かつそれを外に説明し見せていくということでしょうか。

御厨 そうですね。説明することが大事ですね。なかで思っているだけだと内向的になって、しかも排他的になりがちです。そうではなくて、それが広がっていくって、外に説明するなかでもう一度自分を位置づけるといった作業が必要でしょうね。

祭りを行なうことで地域力が育つ

上山 伝統芸能のない場所では、お祭りを作ったり、スポーツイベントをやるとよい。シンポジウムで日本サッカー協会キヤペテンの川淵三郎氏が発言していましたが、「Jリーグと鹿島の関係はよい例ですね。鹿島は特に大きな特徴のない街で、石油化学コンビナートなどができて発展しましたが、転勤族でやってきてまた帰っていくというイメージの街だった。そ



こにサッカーJリーグのクラブチームができて、旧住民と新住民が一緒になって鹿島、鹿島と応援しているなかで地域ができていったということでした。

御厨 地域という意識が生まれると暴走族がいなくなったり、犯罪も減るといふような意外なところにつながっていくようですね。まさに地域の安全、安心が実現するわけです。

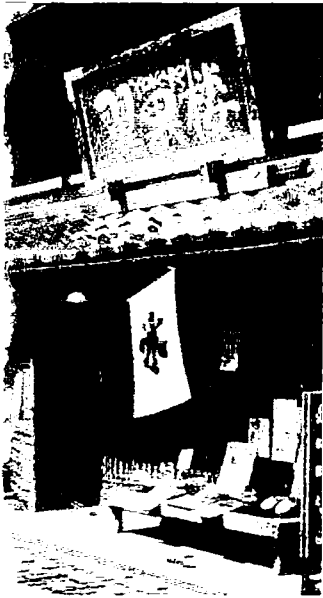
上山 最近、私はお祭りと地域力、いわゆるソーシャルキャピタルの関係に注目しています。なぜなら、お祭りの準備で日ごろから男は男で、子どもは子どもで、奥さんは奥さんで集まって練習などをします。それが地震とか災害のときのいわゆるソーシャルキャピタルとして機能する。生活の智恵ですね。地域力イコールお祭りをやる力であり、それが文化力とも言えます。

御厨 いろいろな応用動作がきいてくるんですね。何と云っても人と人のつながりが重要ですから。

上山 それにしても、みんなで誇りをもつて集まれる核、地方独自のものが何か必要です。それはおそらく広い意味での文化でしょう。サッカーのように外から何かを持ってきてもいいし、祭礼の復活のようにその土地にあるものをどんどん掘って磨けば皆で楽しめる。外にも発信できる。そういう発信が必要でしょうね。

↓NPO法人市民創作「函館野
外劇」の会が行なう野外劇は特
別史跡の五稜郭を使いながら、
函館に起きた歴史的な出来事を
市民たちの手で表現する。16
回目の2003年を期に少しずつ
内容のリニューアルが始まって
いる。写真下左はコロボックル
の妖精の踊り。下右は西洋式築
城五稜郭の完成の場面

→滋賀県長浜市では、明治時代の建築で
黒澤暎の棟相から「黒壁銀行」として親
しまれていた第三十銀行長浜支店を中
心に市街地の活性化を行なっている。
1988年、民間企業より8名の有志が集い、
長浜市の支援を受けた第3セクター株式
会社を設立。ガラス工芸(写真左)を核に、
ガラスショップ、工房、ギャラリー、ガラ
ス美術館、レストランなど、毎年200万
人を突破する観光客を集めている



地域の文化遺産がもつ文化力

御厨 NPO法人の市民創作「函館野外劇」の会は地域の文化遺産でもある函館五稜郭で実際に芝居をやり、それが国際的に有名になって、内外から人々が集まっています。函館在住のフィリップ・グロード神父が提案して市民ボランティアが動いて、国内で初めての市民史スベクタクルが生まれた。

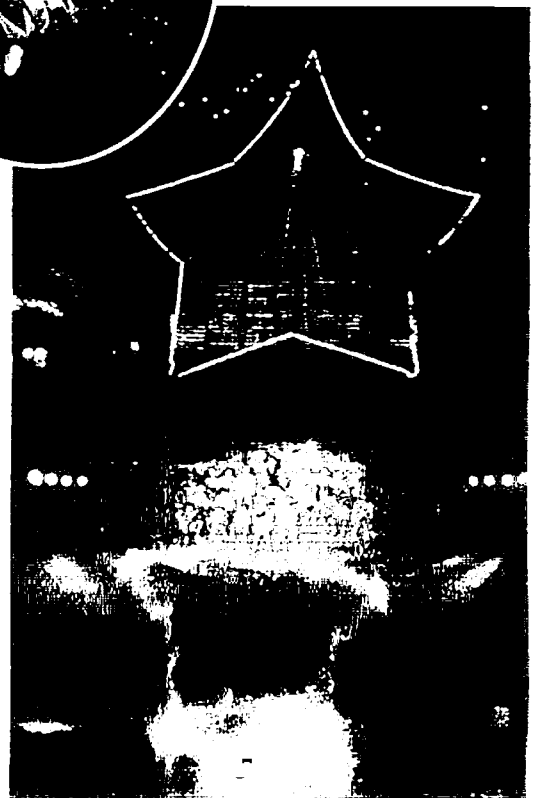
上山 もともと地元にある文化遺産をうまく使うという着想は大事ですね。函館の場合、そこでいきなり海外に飛ぶところがすごい発想力ですね。

御厨 そこであまり厳格に考えすぎてはいけません。そこであまり厳格に考えすぎてはいけません。

上山 おもしろいじゃないか、あそこでやってみたらどうかということですね。幕末の外人居留地のなかで函館だけが唯一外人居留地区を区別しないで、ふつうの町中に外国人が住めた。いきなりあれだけ飛べるのは、そうした伝統が生きているのかもしれない。地域の文化を育てるときに外国文化を外から持つてくるというのは、一つのヒントでしょうね。

御厨 地域が国際的に開かれるときの力はそうしたところにある。行政とは直接は関係ないですね。

上山 滋賀県長浜市の黒壁の例もそうですね。古い昔の銀行の建物が壊されることになった。何とかしようとおわわて民間主導で会社を作った。おもしろいのはそのときのメンバーはみんなその地区の古い住民ではなく、



周辺地区のビジネスマンだった。彼らがともかく守らなければとひと肌脱いだ。それで買収したが、建物を何に使っていいのかわからない。ある年配の方が思いついて、ヨーロッパのガラスでいこうと。そういう形で一気に飛躍し、成功したわけですね。「よそ者」というか、外の発想があつて飛べた。

御厨 そうしたことが、地域の発想力の豊かさでしょうね。言葉は悪いですが、「よそ者」というのは大事ですね。いい大人形劇フェスタの行政の担当者も地元出身ではありません。地元の人ではなかなか考えないかもしれないので、自分が行政に入つて何かつなごうと思つて、それで成功したんですね。

外国での体験を地域に生かす

御厨 先日のシンポジウムでお会いしておもしろかったのは愛知県犬山市議会議員のアンソニー・ピアンキさんですね。ニューヨークからやつてきて、犬山市に住みついて議員になつ



も、仲間うちではそれがなかなか言えない。
御厨 外国人の常識が地域の常識になっていくという発想も
もしろいと思いました。

上山 国境を超えるというのもジャンプを生みますね。例えば
地元の家元などの伝統文化の組織が行き詰まったときなど、
海外公演をしてみる。すると若い人がリーダーになったり、
英語のできる女性が全体を取り仕切る。これはチャンスです
ね。普段のピラミッド型の組織運営ではなくて、全然違うア
プローチで楽しくできたりする。帰ってきて、組織運営のや
り方が変わるとかいった経験があるんじゃないでしょうか。
御厨 そうですね。外国で受ける経験のなかでもう一度自分を
位置づけ直すということもありますね。数年前に地域文化の
担い手たちと研究会をやったときに、彼らの最大の悩みはみ
んな二代目だということでした。上には一生懸命築いてきた
初代がいて、下には言うことを聞かない若者がいる。二代目

た。彼が議員になるだけでも、そもそも
議員とは何だろうか、みんなが考え始
める。彼は一生懸命何か違うことを見
つけてやろうとし、それに対して票が集
まるわけですからね。政治の世界とか行
政の世界も少しずつ変わり始めている。
上山 シンポジウムでも、「外国人をうま
く活用する」という言葉が出てしまっ
た。地元の人たちが自分たちの仲間うち
だと直接言いにくいことを、ピアンキさ
んに言ってもらおうといいた。彼が言っ
ている内容はある意味で常識なんだけれ
ど

はいわば両者に挟まれた中間管理職なんです。そんな状況
のなかで外に広がっていくとおもしろい。
また、同じ地域のなかでも、例えば木綿を使った伝統工芸
が和紙の技術と提携してみると、そこで何か180度変わ
るんです。外へ開いていく努力をすると、中間管理職が急
に元氣になり、やれるという話になる。地域にすでにあるほ
かの要素と結ぶことと、そしてやはり海外へ出る。そういう変
わり方みたいなものがありますね。
上山 そのプロデュースングを中間管理職の人がやると組織が
収まる。

外国文化と身近な文化を混ぜてみる

上山 日本の素材を海外の素材でアレンジし直して、例えば、
民謡をジャズ風にアレンジして、若者のジャズバンドが演奏
してみる。もともと近いものだから案外おもしろい音楽がで
きるはず。通常出合わないもの同士をぶつけてみる。音
楽とかアートなどでは、いきなり外国人を連れてこなくても、
そういう方法で新しい着想が出てくる。浅草サンバカーニバ
ルも一つの成功例だと思います。ある意味ではコテコテのイ
ベントですが、浅草の気安さ、田舎くささにブラジルの感じ
が非常にマッチしている。

御厨 どこか田舎くさいけれども、ハイカラみたいなね。たぶ
ん日本で一番受けるのはそこでしょうね。純粹に西洋のもの
をまねするのは駄目かもしれない。

上山 もつと身近なものを混ぜてみるということですね。日本
自体がすでにいろいろ混ざっているわけですから。

御厨 越前の和紙ですが、最近成功したのは東京でのインスタ



うえやま しんいち ●慶應義塾大学教授（大学院政策・メディア研究科）／京都大学法学部、米プリンストン大学大学院卒業。運輸省、マッキンゼー（共同経営者）、米ジョージタウン大学研究教授を経て現職。大阪市立大学教授（大学院創造都市研究科）を兼務。専門は企業・政府の経営改革。主な著作に「政策連携の時代」「行政の経営改革」「自治体再生戦略」「ミュージアムが都市を再生する」など

レーションですね。伝統的な和紙工芸じゃなくて、和紙で全然違うものを作ってしまう。昔の和紙をやっている人々たちから見るとんでもないと思うんでしょうが、それで若者が戻ってくるという現象があるわけです。実際、商品化もでき、恵比寿などのお店で売られています。和紙を和紙として極めるのも大事ですが、何かと混ぜると現代の感覚に合うものもできて意外にいいかもしれない。そうすると越前にずっと閉じ込められていた文化が、そこでバツと広がってくる。

日本のチームワークが注目されている

御厨 地域力や地域文化にとっては、停滞は困りますね。同じものの繰り返しは駄目で、そこにどうやって常に新風を吹き込んでいくか。実際にはきついことでもあると思います。

上山 伝統芸能のなかでは歌舞伎は成功例でしょう。海外に行ったり、オペラと混ぜてみたり、あるいは個人としてタレント活動をやってみたり。

御厨 勘九郎がニューヨークに行つて演じてみると、その街と意外にマッチしちゃったみたいだな、ああいうことなんでしょうね。勘九郎自身がものすごく興奮してましたね。

上山 科学者やイチロー選手などのスポーツマンも含めて、日本人で飛び抜けた才能を持った個人がどんどん出始めています。日本人が企業の肩書きではなく個人の名前で海外で活躍する時代ですね。そして、次はおそらく「集団」、つまりお祭りチームなどが外に出て活躍する時代になるかもしれない。その先駆けがポケモンやスタジオジブリだろうと思います。あそこには日本風の物語性が入っています。それがだんだん海外でなじんでいく。ハリウッド映画では割り切れないよう

な世界観の一つ、今までイギリスやフランスの映画などが出してきた相対的なテイストみたいなものが日本から出せる時期に来ていると思うんです。

太鼓がいま海外で評判ですが、それは集団的組織力、チームワークが受けているのでしょう。ヤンキースの松井秀喜選手が人気があるのも、彼がチームワーク重視の礼儀正しい日本人だからです。

御厨 アニメやマンガの世界は、まさにチームワークで、一人の人間が作っているというわけじゃないですね。

上山 何人も同じ顔を描けるわけですから、これはすごいチームワークです。海外では考えられない。ストーリー性というか、奥の深さにおいても全然違います。

御厨 勧善懲悪じゃないところですよ。

上山 世界の多くの文化はアメリカよりもむしろ日本に近い。だんだん海外は日本のそういう潜在可能性に対し目を向け始めている。

日本のソフトパワーは普通の集団が担う

御厨 それが最近、ソフトパワーといわれるものでしょう。

上山 そうですね。日本のソフトパワーというと、従来は歌舞伎か生け花かという議論になりがちですが、今やスシやアニメ、ステイールドラムなども含む総合力なんですよ。

御厨 普通の人が集団で出ていく。これはソフトパワーとしたら強いですね。お祭りをやっている人たちが出ていく。しかも、それが東京経由ではなくて、地域同士が直接つながったものが輻輳的にいくつもできる。パワーとしての重層性が生まれると、日本への理解もより進むでしょうね。

シンポジウム

「地球が舞台」

—地域文化と国際交流を考える— を開催しました

シ ジャパンファウンデーションでは、サントリー文化財団と共催で、シンポジウム「地球が舞台—地域文化と国際交流を考える」を2004年11月20日(土)に開催しました。ジャパンファウンデーションの「地域交流振興賞(現・地域交流賞)」とサントリー文化財団の「地域文化賞」の両賞受賞団体が、2002年度までに13団体に達したのを契機に、2003年度に「地域文化と国際交流を考えるワークショップ「地球が舞台」」を、全国3カ所(長野県飯田市、富山県利賀村、佐賀県武雄市)で開催し、議論を深めてきました。今回のシンポジウムはそのまとめにあたります。

シンポジウムでは、日本サッカー協会の川淵三郎キャプテンによる基調講演のあと、全国各地で地域変革や地域活性の担い手として活躍されている方々をパネリストに迎え、幅広い視野から地域活性化と国際交流の新しい可能性について討議していただきました。4時間以上にわたる長いシンポジウムにもかかわらず、会場に集まった約150名が真剣に討議に参加していました。

例えば、会場からの最後の質問となった、早稲田大学の学生からの質問は、「2005年3月に紛争当事国を中心に世界各国から若者を日本に招致して、日本の若者と「対話による共生」をテーマに意見交換の場を作りたい。そこに早稲田という地域の要素を盛り込みたい」というものでしたが、パネリストから次のような回答を得て、活動が実現する運びとなったことは素晴らしい成果と言えるでしょう。

ピアンキ● 日本人は、「交流」を考える場合、先方の勉強をすることだと思っています。しかし、交流の片方は日本のことを宣伝する、知らせることです。相手のことが知りたいなら、まず自分たちの地域について勉強することが大切です。あとは、「前例」より「前進」を、ですね。

輪島● どんな催しでも、相手の方に何らかの役割を担ってもらうことが、その交流を深めるのではないのでしょうか。実際に自分がそこで一定の役割を果たし、感激して帰られることが多いわけですから、何らかの形で外国の学生さんにも参加する機会を作ってはどうかと思います。

上山● 最初に仲良くなることですね。劇をやるのが楽しい。複数の国の人たちが演劇をするプロセスで言葉が通じなくても、コミュニケーションがとれたり、お互いのキャラクターが理解できたりします。例えば、早稲田で商店街が使えたら、外国の方に店番をしてもらうとどうでしょうか。八百屋さんで野菜を売ってみるとか、呼び込みをしてみるとか、日本のことがよく分かっていると思います。

御厨● エネルギーと迫力、あるいはそういう「何かやろう」っていう精神、これがやっぱりいちばん大事ですね。私も「外からばかり見ないで、おみこしを担いでみるか」という感じになりました。



日本サッカー協会の川淵三郎キャプテン

シンポジウムの主な内容

●基調講演

「世界に羽ばたく地域密着型の日本サッカー—その戦略と成果」

川淵三郎(日本サッカー協会キャプテン)

○パネルディスカッション

(コーディネーター)

御厨貴(東京大学教授)

(パネリスト)

上山信一(慶應義塾大学教授)

アンソニー・ピアンキ

(愛知県犬山市議会議員)

輪島幸雄

(市民劇作「函野野外劇」の会理事長代行)



地域の活性化に国際交流が果たす役割について、熱い議論がかわされた
写真撮影(上と左) 高木厚子

上山 企業のTQC(品質管理)運動などで実証されたように日本のソフトパワーはチームワークに尽きるわけで、そのあたりを意識して活動したほうがいいですね。だとすれば、今後は普通の町からチームで海外に行くという方向ですね。災害支援やスポーツの試合でもいい。日本人が海外に行つて、何かやつて帰ってくるのは日本の国際化のためにもいい。

御厨 それなら民間でもいろいろ支援できますね。この地域はこんな活動をしていますというマップがあれば、それを見ながら、自分の地域は何ができるかと考えられるわけで、そこにジャパンファウンデーションなどが支援する余地があると思います。集団をどうやって支えるかは、今後いつそう大切なテーマになっていくでしょうね。